

# 日本輸血・細胞治療学会 e-News

日本輸血・細胞治療学会 ニュースレター 第24号

2023年  
9月発行

本号の掲載記事

Page 1	第30回秋季シンポジウム開催に寄せて
Page 2	輸血療法に関する補足説明業務の活動報告
Page 3	学会認定・臨床輸血看護師資格取得者へのサポートを考える
Page 4	血液センターよもやま話
Page 5	編集後記
Page 6	一般社団法人日本輸血・細胞治療学会 広報委員会

## ほんなこて待っとるばい！\*

### ～第30回秋季シンポジウム開催に寄せて～

長井 一浩

独立行政法人 国立病院機構長崎医療センター臨床検査科

2023年10月26日、27日、長崎市において開催の日本輸血・細胞治療学会第30回秋季シンポジウムが開催されます。この度、私は、その会長を拝命いたしました。このような栄誉ある機会を賜りましたこと、また佳境を迎えております開催準備にあたり各方面よりご尽力を頂いておりますこと、全ての関係各位に深謝申し上げます。

本学会の全国規模の学術集会在九州で開催されますのは、2017年の第24回秋季シンポジウム（於・大分市、会長 佐分利能生先生）、2019年の第67回学術総会（於・熊本市、総会長 米村雄士先生）に続くものであり、長崎市では2001年、当時の長崎大学医学部附属病院輸血部長故・上平 憲先生が会長となられた第9回秋季シンポジウム以来22年振りの開催と、本当に久々の事でございます。

会場は、長崎市中心部の出島メッセ長崎というコンベンションホールです（[施設案内 | 出島メッセ長崎 \(dejima-messe.jp\)](#)）。2022年9月

西九州新幹線開業をはじめ再開発が進むJR長崎駅エリアに位置しており、繁華街や観光スポットへのアクセスも良好な立地です。長崎市は南北に細長い街でありこの街並みに沿って走る路面電車は、江戸期鎖国時代に華開いた「和華蘭」と称される多国籍文化に彩られる歴史を刻む旧跡（写真1）、「最後の被爆地に！」という人類の悲願を静かに湛える原子爆弾関連遺構の数々等、市内各所を訪れて頂くのにはたいへん便利です。特に一日乗車券をご購入いただきますとこれでその日は何回でも乗り放題であります（一日乗車券の詳細は以下のURLをご覧ください、



写真1：  
グラバー邸  
外観



写真2：  
軍艦島

<https://www.naga-den.com/pages/12/>。

また、路面電車の路線以外でも秋の長崎を満喫できる場所はたくさんあります。軍艦島に代表される近代日本の産業を支えた世界遺産（写真2）、市内稲佐山からの夜景、少し脚を延ばすと五島列島の教会群（これも世界遺産！）、雲仙普賢岳と温泉街、温泉と云えばお隣の佐賀県にも名湯が数々、等々。そうして、西海の新鮮な海の幸をはじめとする九州・長崎ならではの秋の味覚を存分にご堪能いただければと思います（写真3）。末尾のURLもご参考にいただければ幸いです。



写真3

さて、シンポジウム後のお楽しみは尽きないところではありますが、ここで本シンポジウムの内容に多少触れまして筆をおきたいと思えます。今回のテーマは、「集合知としての輸血・細胞医療～DEJIMAから世界へ」であります。「集合知：Collective Intelligence」とは、「多様な個人で構成されるコミュニティにおいて、相互の協調と協働を通じ、より高次の複雑な思考、問題解決、統合、創造性を獲得する力」であると云えましょう。このような観点から、基礎医学から社会的な課題に至るまで、輸血・細胞療法を取り巻く多面的なテーマについて議論を深めるべく、多彩なセッションを企画いたしました（[Home | 第30回日本輸血・細胞治療学会秋季シンポジウム \(med-gakkai.jp\)](#)）。現地会場での交流はもちろんのこと、ライブ配信やオンデマンドのハイブリッド開催併用の利点を活かして参ります。1855年、Pompe van Meerdervoort先生が出島～DEJIMAを門戸として来日、以後我が国の近代西洋医学が興ったこの長崎の地に、多くの学会員の皆様が全国からご参集頂き、闊達な議論を通して新たな連携と未来へ向けた知の種子が撒かれんことを、そうして医療の現場において着実に結実することを切に希望致します。

10月の長崎は、心地よい天候で野山も秋の彩り鮮やかな時期であります。私共も、精一杯のおもてなしが出来ますよう努めて参ります。皆様のご来場、ご参加を心よりお待ちしております。

[catalog\\_map.pdf \(nagasaki-visit.or.jp\)](#)

[長崎市公式観光サイト「travel nagasaki」\(at-nagasaki.jp\)](#)

[【公式】長崎観光 / 旅行ポータルサイト ながさき旅ネット \(nagasaki-tabinet.com\)](#)

\*ほんなこて待つとるばい！；「ほんとうに、心からお待ちしてますよ！」の意味

(写真提供：(一社)長崎県観光連盟)

## 輸血療法に関する補足説明業務の活動報告

内田 有咲

熊本赤十字病院 検査部

医師の働き方改革を進めるためのタスク・シフト / シェアの推進に関する検討会において、臨床検査技師が現行制度上実施可能とされた業務の中で「医師の説明等の前後に輸血に関する定型的な事項や補足的な説明と同意」（以下、補足説明業務）が特に推進するものとして挙げられました。そこで、当院は臨床検査技師（以下、技師）による補足説明業務を2021年11月に開始しました。

補足説明の対象は輸血を必要とする血液腫瘍内科外来の患者としています。医師より輸血療法の実施について患者さんへ説明がされた後、技師が外来の診察室または待合室



に赴き患者さんへ補足説明を行います。補足説明が初回の患者さんの場合、「製剤種・目的」「副反応」「感染症」等の項目を中心に時間をかけて説明し、2回目以降の患者さんの場合は、輸血療法に関する理解度を考慮して説明

すると同時に、自宅での副反応発生の有無について聞き取りをしています。説明後は輸血同意書に不備がないか確認し、患者さんへ署名を求め、同意書の受領を担っています。一連の補足説明業務後、患者さんごとに補足説明日および説明時の様子・副反応情報等を記録に残し、補足説明前に記録を確認することで、説明者が異なる場合でも患者さん個人に合わせた対応が可能と考えています。

補足説明業務を担当する技師は、患者さんに臨機応変に対応できる力量が求められます。力量評価表を用いて輸血検査から輸血療法に関する内容全般について評価しており、一定の知識が身につくようにしています。また認定輸血検査技師の指導の下、補足説明の見学や、実際に患者さんへ説明を行う実践的な訓練を行っています。先輩技師からフィードバックを受けることで効率的に経験を積むことができていると考えます。

タスク・シフト/シェアによる医師の業務負担軽減を目的に開始した補足説明業務でしたが、患者さんの輸血に関する知識の向上や外来看護師との情報共有の強化など副次的な効果も感じています。補足説明を受けた患者さんにアンケート調査を実施し、技師の説明によってより理解が深まったと答えた患者さんが過半数を占めました。医師は患者さんの状態や治療など伝えることが多く、診察時間内に輸血について話す時間は限られるため、補足説明が患者さんの輸血療法に関する理解度向上に繋がったと考えます。また、輸血準備の進捗状況や輸血関連検査の情報等について看護師と直接話す機会が増えたことで、より詳細に伝えることができ、看護師側からも患者情報を得られるようになりました。患者さんの性格やその日の体調など、一見輸血と関連しない内容でも患者さんと円滑にコミュニケーションを取る上でとても重要な情報です。補足説明業務を通して、院内の輸血療法の充実化に携わることができたと思っております。今後も臨床に貢献できることがあれば積極的に取り組んでいきたいと考えます。

## 学会認定・臨床輸血看護師資格取得者へのサポートを考える

東山しのぶ

### 奈良県総合医療センター看護部

臨床輸血に精通し安全な輸血に寄与することのできる看護師の育成を目的として、2016年に当院で4名の学会認定・臨床輸血看護師が誕生しました。以降、学会認定・自己血輸血看護師（以下自己血看護師）とともに輸血関連資格保有者（有資格者）が連携し、有資格者を増員しながら輸血部部长・輸血部技師とともに輸血医療チーム（以下TMT）を結成し活動しています。

当院の有資格者は2021年度時点では7名（内、自己血看護師2名）でしたが、コロナ禍でTMTの活動が制限されている間に有資格者が倍以上の人数である16名（内、自己血看護師3名）に急激な増員となりました。

今回、当院の有資格者を対象に「資格取得後の不安」についてアンケートを実施したところ、有資格者の多くが「活動目標の設定がわからない」や「活動時間の確保が困難」等の自身の活動に不安を感じていたことがわかりました。また、コロナ禍に取得したメンバーから「資格取得後の活動内容を知らなかった」「活動の窓口が不明」等の回答が見られました。

TMTは、輸血療法委員会の下部組織である監査小委員会として輸血療法の実施状況を監査する目的で発足したのがもととなっています。本学会が2017年に提唱した「輸血チーム医療に関する指針（以下指針）」を参考として、2020年に当院は監査小委員会を監査の他に研修や有害事象発生時対応、コンサルテーションの機能をもつ組織に改編しました。監査小委員会の名称をTMTに変更し、輸血療法委員



病院外観



コロナ禍における  
新人研修の様子

会の下部組織としました。TMTは「指針」に示された活動を行うことを目標とし、定期的な監査や看護師や新人職員に対する研修を行ってきました。しかし有資格者が看護部の各種委員会活動を兼任している場合が多く、看護部の活動が優先されている状況となっています。また、TMTに参加している有資格者の専門的知識をTMT活動に有効に活用できていないため、有資格者の満足度、TMT活動ともに十分に高い状態とは言えません。TMTはまだ改善の余地があり、組織として未熟であると考えられます。



研修用の  
デモラベルを  
貼り付けた製剤  
バッグ

取得した輸血関連資格を活かした活動が出来ているという実感が少なければ、資格の継続に繋がらない可能性があります。有資格者が資格の更新を辞める選択をするようであれば、新規に輸血関連の資格を取りたいと考える者や次に資格の更新を控えた者に憂慮を与えかねません。

そこで、今年度は新型コロナウイルス感染症による委員会活動の制限が外れ、TMTの活動として新規メンバーを含めた再立ち上げの年と位置付ける事にしました。活動目標を「TMTの活動内容を知る」とし、活動内容は「有資格者自身の所属部署の輸血実施記録を半年に2回監査することで、担当部署の現状および問題点を知る」「TMTの病棟ラウンドに今年度中1回は参加し、病棟監査の様子を知る」「新人研修に参加し新人教育を行う」と示しました。有資格者の看護師長・主任看護師は、看護部各種委員会以外にも多数会議や業務があるため、記録監査は有資格者自身ではなく所属部署内の記録委員や医療安全委員等を巻き込んで実施してもらい、自身も内容の把握をしてもらうようにしました。また、全員に「可能な範囲で活動し、できない時は無理をしない」という条件も追加しています。有資格者の看護師がTMTの活動を実施・継続するにあたり、現在私が特に重要であると捉えるサポートが以下の3項目になります。

- ① TMTの活動に対し負担を過度に感じず、活動した実感を得られる目標の提供
- ② 部署での活動に悩んだ時、資格更新時に相談できる組織づくり
- ③ 新人研修等、有資格者の活動場所を確保

TMTの活動として、院内での輸血教育活動や輸血監査への関わりは今後も継続して行い、活動方法や知識のブラッシュアップも当然行っていくこととなります。さらに、これからは有資格者のモチベーションを維持し、資格更新・継続をためらわない体制づくりにも目を向けていく必要があります。

## 北海道における血液輸送と災害時の供給体制

齊藤 和哉

日本赤十字社 北海道ブロック血液センター

ニュースレター第23号では「広大な北海道における血液輸送の取り組み」と題し北海道ブロック製剤部門より伝えさせていただきました。

今回は札幌で製品化された血液製剤をどのように各供給施設（札幌二十四軒を含め道内11カ所）及び医療機関へ届けているかご説明致します。（図1参照）

現在では効率化の為、検査部門と製剤部門が札幌に集約し製品化された血液製剤を各供給施設へ1日2便体制で恒温車両を使用し分配して補充しております。また期限調整の観点から札幌へ引き戻しも同時に行い在庫をコントロールしています。

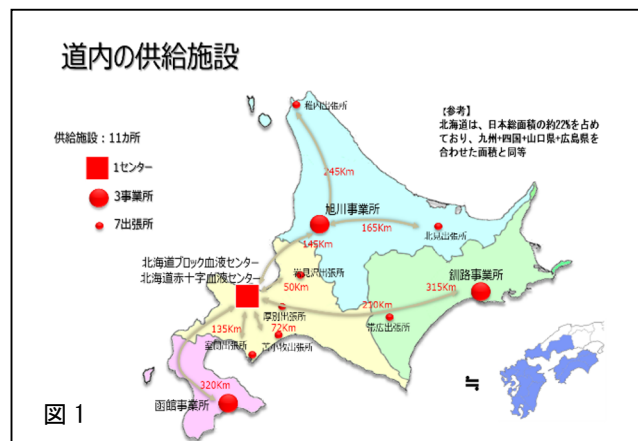


図1

輸送について苦慮する事例は、北海道特有の暴風雪が発生すると定期輸送便が利用できず JR 便の利用、緊急車両による直配をせざるを得ない状況となります。在庫製品の赤血球製剤、血漿製剤は各施設、約平日供給 3 日分の在庫を保有しておりますが、予約製品の血小板製剤は日々補充が必須となります。JR が運休するほどの悪天候時は国道や高速道路自体が機能しなくなりますが、北海道開発局へ要請し国道を除雪車先導の下（図 2 参照）、徐行しながら数百キロ輸送を行います。また、国道の使用ができない場合はネクスコ東日本へ要請し高速道路を緊急車両のみ走行させていただく事もあります。こうした対応は各供給施設への輸送のみならず緊急依頼発注の医療機関への直配時も行っています。無事に血液製剤をお届けできていますが、帰路までの対応ではない為、現地に配送職員もお届け（その日は現地に宿泊）となってしまうことが難点です。



図 2



図 3

まだ記憶に新しい 2018 年 9 月に発生したブラックアウトでは、信号機が停止し道路に亀裂が生じ（図 3 参照）安全確保の為に、増車した上で 1 車両 2 名体制とし 1 台あたりの配送件数を減らし範囲の縮小を行いました。震災当日の発注件数は通常の 6 割程度で定期 1 便前に状況確認連絡を行った主要医療機関からの発注がほとんどでした。道が制定している「災害時における医薬品等の供給・管理等に関する要領」の主な改正内容として 1. 「医薬品等」に「血液製剤」が含まれることが明記。2 「医薬品等関係団体」に「北海道赤十字血液センター」が明記。3. 災害時における血液製剤の確保、医療機関の発注、供給体制等が明記され、様々な支援・協力を得られることが明確となっております。

また、災害時には通常外来で輸血予定患者の輸血が中止となる事が多いことも含め、日頃から医療機関と密な連絡体制が必要となることを痛感致しました。各供給施設の在庫や輸送距離が一律ではない事をご理解いただき早めの予約製剤発注や事前のオペ情報共有に、今後ともご協力の程よろしくお願いいたします。

## 編集後記

今年の夏は猛暑の日々が続きました。また新型コロナウイルス感染も収束がみえない状況で、早く落ち着きを取り戻し暗いイメージを払拭できる日を願っています。

さて、今回の第 24 号 e-News では 10 月 26 日、27 日に長崎県で開催されます日本輸血・細胞治療学会秋季シンポジウムについて、会長の長井先生にご紹介をいただきました。長崎市は多国籍文化に彩られる観光スポットがありますので、路面電車などを利用して訪れてみてはいかがでしょうか。内田検査技師からは、タスク・シフト/ シェアによる医師の業務負担軽減を目的に開始した補足説明業務が、患者さんの輸血療法に関する理解度向上に繋がったとの活動報告をいただいています。看護師からの報告では、東山看護師より有資格者を中心に安全な輸血療法のための輸血医療チーム（TMT）を結成し、その活動について寄稿をいただきました。斉藤先生からは、北海道における血液輸送と災害時の供給についての厳しさの紹介をいただいています。広大な北海道ならではの医療機関と密な供給体制が、日頃より重要であることが理解できる内容となっております。それでは、長崎の秋季シンポジウムにて会員の皆様とお会いできることを楽しみにしております。（岸野 光司）

---

## 一般社団法人日本輸血・細胞治療学会 広報委員会

### 委員長

加藤 栄史 (医療法人福友会 福友病院介護医療院)

### 副委員長

松本 雅則 (奈良県立医科大学附属病院)

### 委員 (50 音順)

生田 克哉 (北海道赤十字血液センター)  
石井 洋子 (船橋市立医療センター)  
岸野 光司 (自治医科大学附属病院)  
小見山 貴代美 (豊田厚生病院)  
鳥海 綾子 (慶應義塾大学病院)  
長村 登紀子 (東京大学医科学研究所附属病院)  
野崎 昭人 (横浜市立大学附属市民総合医療センター)  
東山 しのぶ (奈良県総合医療センター)  
日高 陽子 (東邦大学医療センター大森病院)  
藤井 紀恵 (藤田医科大学)  
藤田 浩 (東京都立墨東病院)  
松本 真弓 (神鋼記念病院)  
森山 昌彦 (東京都立墨東病院)  
山崎 喜子 (青森県立中央病院)  
山田 麻里江 (佐賀大学医学部附属病院)  
吉田 雅弥 (熊本赤十字病院)  
米村 雄士 (熊本県赤十字血液センター)

### 担当理事

羽藤 高明 (愛媛県赤十字血液センター)

### 編集協力

佐藤 裕基 (旭川医科大学 病態代謝・消化器・血液腫瘍制御内科学分野)